

WE認証者が600人超在籍する企業 「山九(株)」の取り組み

《WE 認証者インタビュー》 溶接管理業務は作業品質の要

●WE を施工管理上の必須資格に位置付ける

山九グループは、プラント・エンジニアリング、ロジスティクス、オペレーション・サポートを有機的に結びつけた、世界でも類を見ないビジネスモデルを構築している。プラントの企画段階から、設計・建設・重量物輸送・据付・試運転までのトータルなサポートが可能。さらに、顧客の操業支援と設備のメンテナンス、調達・生産・販売までの各種物流にいたるまで、すべてに対応する体制を整えている。なかでも製鉄機械や石炭化学設備などの建設工事、メンテナンスにおいて、溶接作業は欠かせない要素作業の一つに挙げる。日本溶接協会の溶接管理技術者(WE)は施工管理上の必須資格に位置付け、管理職への昇格要件にしている。特別級、1級、2級を合わせたグループ内の資格保有者合計は619人(2014年10月現在)に上る。本号では資格保有者インタビューとして、大卒の技術系新入社員の研修を担当する松尾真人氏に話を聞くとともに、溶接技術に関する組織体制(品質保証部溶接センター、能力開発センター)を紹介する。



高度に熟練した技能集団の育成およびハイテク技術にも対応できる

先進的技術者の育成を目指す西日本能力開発センター

(北九州市八幡西区)

「当社グループの人財^{*)}育成の特徴は、技術系新入社員に対して1年間、初期研修を行うこと。基礎的な知識習得の成果の一つに技術資格があり、メインは日本溶接協会の溶接管理技術者(WE)資格」と語るのは、山九株式会社の松尾真人氏。出身学部によっては入社2年目からWE1級の受験を勧める。「溶接管理業務は自らの専門性の基盤技術であり、作業会社である当社の作業品質の要である。WE1級は当社の昇格要件の一つであると同時に、製鉄所などの付帯設備を構成する溶接構造物の製作、補修の施工管理を理解している証」とWE資格を重視する考えを示す。

^{*)} 山九では人を財産として位置づけており、人材を人財と表記している。

山九株式会社
プラント・エンジニアリング事業本部企画部
参与(人財育成担当)

松尾 真人 氏



●1 級資格は施工管理を理解している証

同社プラント・エンジニアリング事業本部企画部参与(人財育成担当)の松尾氏は、大卒の技術系新入社員が対象の体系的な能力開発プログラム「機工マスターコース」の研修(1年間)に携わる。同社の機工事業に必要な基礎的技術・知識の習得と、鉄鋼・化学の保全、プラント工事の現場作業を経験、知ることにより、技術職社員としてのより良い態度(心構え)の形成と行動習慣を身につける。営業、設計、製作、重量輸送、建設工事、保全事業などにかかわらず、同社の技術を支えていく社員として、さらに社会人としての躰も重視する。

「溶接技術者育成へのステップとして、人を育てる観点から研修をサポートする。1年目の新入社員に対しては基礎、その後段階的に行う技術・技能研修の企画に携わり、その成果としてWE資格者数が増えたり、1級から特別級へのランクアップなどが挙げられる。能力開発体系については、階層別研修、能力別研修、専門別研修、OJTなどで構成し、人事制度と連動して、能力を存分に発揮してもらう場を提供するシステムチックな体系を整えている。担当するのは主に教育体系の見直し、日常的には例年70~80人規模の技術系新入社員とともに過ごす。基礎研修の履修学科は機械、電気、化学、土木など多岐に及び、座学と現場を効果的に組み合わせる。溶接技術はその中の一つの柱である。1年がかりで当社の機工事業に必要な基礎知識の習得に役立つ。院生も含むので平均すれば24~25歳の新入社員は『甥っ子姪っ子』の世代であり、やりがいのあるスタートを切らせたい一心で遠慮なく大きなお世話をしている。昨年4月の自分と現在の自分を比べて変わっていただければいい」。1年間、心を通わせた間柄だけに、正式配属を控えた修了式は「感慨無量」という。

●81年に1級、99年には特別級取得

松尾氏は1974年3月宇部工業高等専門学校機械工学科卒業、同年4月同社に入社。「父親は同様の仕事に従事していた。高専時代は将来、機械系か建築系を考えていたが、親戚の建築士からは学んだことを生かしサラリーマンとして機械関係に従事した方がいいと勧められた。地元・北九州の中でも当社は歴史があり、そのまま地元で働けるかとも考えたが、初任地は福山だった」

入社以来、東中国支店に7年在籍し、製鉄所構内の整備・工事の施工管理に携わる。同支店勤務の81年、WE1級を取得した。

「付帯設備の中の溶接構造物の製作、補修の施工管理が仕事だった。品質保証にあたり、チェックできる目を持たなければならない。施工管理に携わるなら、WE1級を取得することが担当業務を理解している一つの証だった。座学と実習で構成する社内講習の受講や、技術図書を読みふけるうちにさらに興味がわき、取得したい意識が強くなり、最終的には仕事に必要なだから絶対取得しなければならないと考えた。会社の支援もあり必死に勉強した」

東中国支店に続き、君津支店で製鉄所構内の整備・工事の施工管理を担当した後、北九州の八幡支店に配属となった。製鉄所に加え石炭化学関連設備工事も担当。施工に関する積算・工事計画・調達・予算管理・工程管理・工法改善など施工管理能力とともに、設備機能・構造・操業プロセスを理解したうえで実行可能な設備補修・設備管理技術力を培った。

製鉄所内の設備部門で圧延設備の機械を担当した際には、電気・計装・土建の関係部署をまとめ設備を立ち上げる過程で、案件の成案化から実行、試運転調整、引き渡しまで一連のエンジニアリング力を発揮した。

管理職となって99年、WE特別級資格を取得した。「当時は各部署で品質管理体制を構築する段階。失敗事例や品質トラブルを分析した後、対策を講じるうえでより突っ込んだ知識が必要と考えたのが動機だった」

松尾氏は各種機械設備の建設、保全について「担当する施工管理者にとってWEは必須の資格」と強調する。

●1級資格、技術系には2年目から受験推奨

「仮に材質や拘束方法を誤った、あるいは、施工不良によって溶接構造物が要求される精度に納まっていない場合、顧客は受け取らず、コスト上の影響は非常に大きい。特に溶接が関係するものは手戻りがないよう、初期段階からの見目が求められる。溶接構造物の製作精度や据付精度等、品質精度の確保は我々の商売にとって大命題である。したがって、WE資格は必ず取得しなさい、また、取得してからがスタートと肝に銘じている」

重要なのはテキストに記載される溶接施工管理の経験値である。これは会社、個人双方に求められるという。

「作業会社は行った仕事で対価を得る。したがって品質保証が大きな柱となる。個人には専

門性が要求される。溶接施工管理に携わった経験を生かして教えることで、専門性の高い企画、計画が可能になる。この場合、若手がどこまでインプットして、継続的な改善を考慮しているかが重要になる」

WE 資格を取得しないと仕事はできない。ただ、取得してから経験を積まなければならない。松尾氏は大卒の技術系新入社員に対し「例えば出身学部が溶接専修なら2年目で受験しなさい」と進言する。「実務経験2年を踏まえれば、ほかの学部でも翌年には受験できる。早く受験しなさい、が口癖になっている」